

新聞社説における接続表現の日英対照研究

—接続表現の文脈展開機能と段落との関連性—

桶 谷 潤

1. はじめに

「接続表現」とは、「二つ（以上）の言語単位（単語・文節・句・節・文・連文・段など）の間に位置して、前後の意味内容を関係付け、より大きい意味のまとまりとして結び付ける働きをする言語形式」（佐久間 2002：162）とされており、日本語の文章でも英語の文章でも、文脈の流れを明示するためによく用いられている。しかし、その文章内での「文脈展開機能」は同じなのだろうか。例えば、日本語の「しかし」は、英語では“**But**”が相当すると一般的には考えられている。確かに、文と文との意味関係だけを考慮すれば同じ働きをしているとも考えられるが、日・英語の新聞社説などの論説文を、接続表現の前後の2文より広い段落内や複数段落間での接続表現の働きを考えながら読むと、その出現位置や後続する文脈には違いがあることがわかる。

そこで、日本語と英語の論説文の1種である新聞社説の文章において、文間、段落間の意味のつながりを明示する接続表現が、文章全体でどのように用いられ、それが段落・パラグラフ⁽¹⁾の形成とどのように関係しているのかを明らかにする必要があると考える。

2. 先行研究

2.1 日本語の新聞社説の接続表現に関する研究

日本語の新聞社説の段落区分における接続表現を研究した佐久間（1974）は、新聞社説に用いられる接続語句⁽²⁾を、市川（1972）の8種の「文の連接関係の基本的類型⁽³⁾」に基づいてその使用傾向を分析し、(1)出現率は、逆接・添加・順接の順に高い、(2)接続語句を持つ文の出現率は、段落区分箇所よりも段落内部の方が高い、(3)添加型の接続語句は、段落区分箇所に特徴的な表現である、(4)逆接・順接・同列型の接続語句は、すべて段落内部での出現率が高い、等の結果を得た。この結果から、段落区分箇所と内部との文間文脈には、明瞭な質的差異があることを明らかにした。

2.2 日・英語の論説文の接続表現に関する研究

佐藤（1990）は、日・英語の接続表現の使用傾向の違いについて日本語、英語、英語訳、日本語訳の論説文を分析し、(1)日本語ではパラグラフの冒頭に接続表現を用いる傾向が英語よりも高い、(2)日本語は「添加」「逆接」が多く、英語は「逆接」「添加」の順に多い、等を明らかにした。

また、西（1998）は、日本語は朝日新聞の社説、英語は“The New York Times”の社説の接続表現の使用傾向を分析し、(1) 文頭出現では、日本語は逆接型が最も多く、次いで添加型、順接型の順であった、(2) 出現箇所では、段落区分箇所より段落内部での出現が多いが、対比型は段落区分箇所の方が多く、(3) 英語は、原文、英訳とも逆接型、添加型の順に多く、日本語と同様の傾向が見られた、等の結果を得た。

以上の研究等を通して、新聞社説における接続表現の使用傾向が解明されているが、分析資料の種類や年代によって、段落数の変化などから出現箇所や多用される接続表現の種類に違いが見られるのも確かである。さらに、接続表現の文章全体の中での文脈の進め方や、それが段落形成とどのような関わりを持っているのか、その関わり方が日本語と英語でどのように異なっているのかについては、十分な実証的分析が今までのところなされていない。そこで、日・英語の対照文章論の立場から日・英語の接続表現の使用傾向、及び文脈展開機能と段落との関連性を分析し、日本語の段落と英語のパラグラフの質的差異の一端を明らかにしたい。

3. 研究目的と研究課題

本研究は、日・英語の論説文の中でも、先行研究において分析対象となった新聞社説を分析対象とし、接続表現に焦点を当て、その文章中での使用傾向の変化、文脈の進め方や段落形成との関連を明らかにすることを目的とする。その目的達成のために以下の課題を設定する。

- 課題1** 新聞社説における接続表現の使用傾向（1 文章における使用数・種類・出現位置）がどのようにになっているのか。
- 課題2** 段落の開始箇所及び内部において、日・英語で接続表現が果たす文脈展開機能にどのような違いがあるのか。
- 課題3** 文章全体及び段落内における接続表現の使用傾向から、日・英語の接続表現の文脈展開機能が段落形成に果たす役割にどのような違いがあるのか。

4. 分析方法

4.1 分析対象

本研究では、先行研究で分析対象となった日本語2社、英語1社の新聞社の社説全40文章を分析対象とする。内訳は以下の通りである。

- (i) 『読売新聞』社説（2019年3月10日～16日）10文章
- (ii) 『朝日新聞』社説（2020年2月1日～11日）10文章
- (iii) “The New York Times”（以下、“NYT”）“Editorials”（2017年3月1日～9日）20文章

4.2 分析方法

本項では、4.2.1で課題1に関わる接続表現の定義を、4.2.2と4.2.3で課題2、課題3に関わる「文

脈展開機能」の定義、及び出現箇所について述べる。

4.2.1 接続表現の定義と種類

日本語の接続表現は、佐久間 (2002: 162) の定義に従い、接続詞、接続助詞、その相当表現、及び連用中止形を含むものとする。ただし、本研究は文を超えたレベルでの接続関係から段落の構成を分析するものであり、接続表現を網羅的に分析するものではないため、文頭に出現する接続表現はすべて扱うが、節末にあるものについては、文とほぼ対等な関係にある等位節の節末に出現し、文脈の進行に影響を与える接続表現 (「～ガ」「～ケレドモ」等) のみを扱う。具体的な文頭接続表現は、石黒 (2016: 164) に掲載されている接続詞全 147 種を基本に、市川 (1978)、佐久間 (2002) に掲載されている表現も併せて分析対象とする⁽⁴⁾。

英語については、Halliday and Hasan (1976: 242-243) に提示された「付加的 (additive)」「反意的 (adversative)」「因果的 (causal)」「時間的 (temporal)」の 4 種に基づく接続表現を基本に設定した。ここでも、日本語と同様に、文頭にある接続表現⁽⁵⁾を中心とし、従属接続詞⁽⁶⁾については、日本語の「～ガ」「～ケレドモ」に相当する “although” “though” “while”, 文中の等位接続詞については “but” “yet” のみを分析対象とする。本研究で抽出した日本語 60 例 (異なり語数 19), 英語 92 例 (異なり語数 27) の接続表現を 4.2.2 の【表 1】に示す。

表 1 新聞社説における接続表現の文脈展開機能と日・英語の接続表現

文脈展開機能	定 義	接続表現 (日本語)	接続表現 (英語)
A 話題開始機能	話題を始める。		
a 話題を示す機能 (Topic-presenting)	文章全体の中心となる話題を示す。		(but)
B 話題継続機能	話題を続ける。		
b1 話を加える機能 (Adding)	同じ話題について、前の話とは異なる新しい話を加え、情報を重ねる。	あわせて/しかも/ 同時に	and/in addition/ then/besides/ meanwhile/worse yet
b2 話を深める機能 (Elaborating)	前の話について (1) 具体例を出したり, (2) 言い換えたり, (3) 説明したり (過去の話等), (4) 理由を述べたりして、話の内容の理解を深める。	中でも/まずは	in other words/in fact/for example/for instance/like/in fact
b3 話をつなぐ機能 (connecting logically)	前の話から論理的・客観的に導かれる事実を述べる。	このため	thus/otherwise/well then
b4 話を拒む機能 (Rejecting)	前の話を受け入れず、相反する話に方向を切り替える。	だが/しかし	yet/but/by contrast/ as it turned out/ although/by contrast/ in practice/instead
b5 話を比べる機能 (Contrasting)	(1) 前の話の例外、部分的に反する内容を述べることで、前の話の内容を弱め、問題点や課題を示したり, (2) 前の話を認めつつも、さらに重要で強調したい話を示したり, (3) 前の話と時間的・空間的に対照的な話を示す。	ただ/とはいえ/だ が/ところが/一 方で/~が/~一 方/~とはいえ	but/although/even though still/however/ instead/while/yet
b6 話を変える機能 (Shifting)	ある話題に関する中心的な話から副次的な話に、逆に副次的な話から中心的な話に変える。	それでは/そもそも	so
b7 話をまとめる機能 (Integrating)	前の話をまとめたり、書き手の見解を述べたりして、それまでの話を一旦まとめ、区切りをつける。	このように/そのた めにも	first
C 話題終了機能	話題を終える。		
c 話題の結論を示す機能 (Conclusion-presenting)	文章全体の結論を示し、文章を終わらせる。	(そのためにも)	(but) / (instead) / (while) / (first)

4.2.2 接続表現の文脈展開機能

節間・文間・段落間に出現する接続表現の「文脈展開機能」を、佐久間（2002：168，2009：112），及び Halliday（2014）を参考に筆者が作成した【表1】の新聞社説分析用の文脈展開機能⁽⁷⁾に従って認定する。

表中「b2」「b5」の定義欄内の数字は、各機能の下位区分を示す。また、機能「a」と「c」は文章全体の構成と関わる機能であり、段落内での機能「B」と同時に二重の機能を持つものである。そこで接続表現欄に二重機能を持つものをカッコで示した。その具体的な機能については第5節で述べる。接続表現の空欄は、本研究での分析資料中には該当表現が無いことを示す。

文脈展開機能は、『『話題』から見た文脈展開の諸相を『文章構造』として記述するための分類』（佐久間 2009：111）であるため、本研究の文から文のみならず、段落から段落への文脈（話題）の進み方の分析に適していると判断し、援用する。日本語と英語で、どの機能を持つ接続表現が用いられやすいのか、それが段落の開始や内部のまとまりにどう関わっているのかを分析する。

4.2.3 接続表現の出現箇所

本研究では、接続表現が文章中・段落中のどの位置に用いられ、それが段落形成にどのような影響を与えるのかを分析する。そこで、出現箇所として、段落の開始箇所と内部における接続表現を分析する。なお、段落の内部の中で段落の最後の文に出現する接続表現にも焦点を当て、段落形成との関連を考察する。これは、段落の最終文にはそれまでの内容をまとめ、段落を終了させるなどの段落形成作用があると思われるためであるが、先行研究において段落の開始箇所は注目されるものの、段落の最終文の考慮が欠けているためでもある。そこで、本研究では、段落の第1文を「開始」、第2文以降を「中間」、最終文を「最終」⁽⁸⁾とし、3箇所を立てることで、さらに段落との関連が明らかになると考える。

5. 分析結果

5.1 新聞社説資料の概観

本項では、課題1に対する分析結果を述べる。

分析資料に関する段落、文、接続表現の新聞社ごとの数値を【表2】、【表3】に示す。表中「接表」

表2 日本語の社説の概観

資料	段落	文	接表
読売新聞合計	147	291	22
平均	14.7	29.1	2.2
朝日新聞合計	115	260	38
平均	11.5	26.0	3.8
2社合計	262	551	60
2社平均	13.1	27.6	3.0

表3 英語の社説の概観

資料	P	文	接表
The New York Times 合計	182	470	92
平均	9.1	23.5	4.6

表4 日本語の複数使用の接続表現

接続表現	文脈展開機能	回数	割合
が	b5	27	45.0
一方で	b5	6	10.0
だが	b4 / b5	6	10.0
ただ	b5	4	6.7
あわせて	b1	2	3.3
そもそも	b6	2	3.3
(その他)		13	21.7
	合計	60	100.0

表5 英語の複数使用の接続表現

接続表現	文脈展開機能	回数	割合
but	a / b4 / b5 / c	36 (8)	39.1
and	b1	7	7.6
although	b4 / b5	6	6.5
instead	b4 / b5	5	5.4
while	b5	5	5.4
yet	b4 / b5	5 (1)	5.4
(even) though	b5	4	4.3
in other words	b2	3	3.3
thus	b3	2	2.2
however	b5	2	2.2
(その他)		17	18.5
	合計	92	100.0

は接続表現, 「P」はパラグラフのことである。

本研究における接続表現の1文章当たりの使用数は、英語が平均で1.6例多い。読売新聞の社説での使用数が少ないことがその差となって現れているが、朝日新聞との比較でも、0.8例の差がある。日本語は9.2文につき1例、英語は5.1文につき1例の接続表現が出現することになる点からも、英語における接続表現の使用が目立っている。また、1段落構成文数は、日本語2.1文に対し、英語2.6文となっており、日本語は1段落2文構成が主体となっている。

文頭か節末（英語は文中）かで比較すると、日本語での文頭使用が全60例中31例（51.7%）、節末使用が29例（48.3%）なのに対し、英語の文頭使用は全92例中66例（71.7%）と、文頭使用では20ポイント以上の差がある。そこで、複数の使用が見られた接続表現を、日本語は【表4】に、英語は【表5】に示す。「その他」は1回使用のみの接続表現である。【表5】の回数欄内のカッコは、文中での使用数（内数）を示す。割合は、全接続表現数に対する使用率（%）である。

日本語では、接続助詞「が」が節末使用29例中27例と、全接続表現60例の45.0%を占めている。英語で接続助詞「が」に相当する従属接続詞の“although”“though”“while”や等位接続詞の“but”“yet”の使用数は、合わせて24例（全92例に対し26.1%）であり、「が」よりも約19ポイント低い。文間、段落間のつながりを表す指標は、英語では文頭で明示する傾向が強いことが窺える。日本語は文頭、節末の使用率の差が3.4%という点から、文頭に偏らず、節末も含めて明示する傾向が強いといえる。

5.2 接続表現の文脈展開機能の使用傾向

本項では、課題2に対する文脈展開機能別使用傾向を分析した結果を述べる。

表6 全接続表現の文脈展開機能の分布

文脈展開機能	b1加える	b2深める	b3つなく	b4拒む	b5 (1)	b5 (2)	b5 (3)	b6変える	b7まとめる	合計
日本語	4 (6.7)	2 (3.3)	1 (1.7)	2* (3.3)	31** (51.7)	14 (23.3)	1 (1.7)	3 (5.0)	2 (3.3)	60 (100.0)
英語	12 (13.0)	7 (7.6)	4 (4.3)	15* (16.3)	21** (22.8)	31 (33.7)	0 (0.0)	1 (1.1)	1 (1.1)	92 (100.0)

$$(\chi^2(8) = 23.502 \quad p < .01) \quad *p < .05 \quad **p < .01$$

表7 文頭接続表現の文脈展開機能の分布

文脈展開機能	b1加える	b2深める	b3つなく	b4拒む	b5 (1)	b5 (2)	b5 (3)	b6変える	b7まとめる	合計
日本語	4 (12.9)	2 (6.5)	1 (3.2)	2 (6.5)	10 (32.3)	6 (19.4)	1 (3.2)	3 (9.7)	2 (6.5)	31 (100.0)
英語	12 (18.2)	7 (10.6)	4 (6.1)	13 (19.7)	12 (18.2)	16 (24.2)	0 (0.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	66 (100.0)

日本語と英語の全接続表現の文脈展開機能の分布を【表6】に、文頭に出現した接続表現の文脈展開機能の分布を【表7】に示す。なお、「b5話を比べる機能」は使用数が多いため下位区分ごとに示し、二重機能があるもの（【表1】のカッコ内表現）は統計処理上の正確性を期すため除外した。【表6】のカッコ内は、全接続表現数（日本語60例、英語92例）に対する使用率（％）で、【表7】のカッコ内は、文頭接続表現数（日本語31例、英語66例）に対する割合である。なお、本研究で比較対照群の有意差を表すためにカイ二乗検定（独立性の検定）を行った場合、残差分析の結果、有意差のあるものをアステリスク（*）で示す。

日本語、英語とも先行文脈の問題点を指摘したり、現状を踏まえたうえでさらに重要な点を指摘したりする「b5話を比べる機能」の使用率が、全接続表現でも文頭接続表現でも顕著に高い。新聞社説は、ある事態の問題点を浮き彫りにし、それに論評を加えるのが一般的な型なので、当然の結果といえる。日本語は全60例中46例（76.7%）、英語は全92例中52例（56.5%）を占める。

また、「b5」の文中での出現位置を見ると、日本語46例中17例（37.0%）、英語52例中28例（53.8%）が文頭での使用となっており、英語で接続表現を用いて文章中での重要事項を示す場合は、文頭で接続表現を用いる傾向が強いといえる。これには前項で示したように、日本語における接続助詞「が」の多用がその要因となっている。

「b5」の内訳は、日本語は先行文の問題点を明示して論を進める「b5(1)」が全体の51.7%を占め、英語よりも有意に使用される傾向がある。日本語「b5(1)」の文章例を次に示す。四角枠は接続表現、山カッコは出現箇所を示す。いずれも筆者が付した。

文章例1 海自艦中東へ 国会は不断の監視を（全11段落26文）

（第1段落から第5段落まで省略）

6 ②現状では、日本関係船舶の護衛は必要ないと、政府は説明している。

⑬ **だが**，予期せぬ緊急事態が生じた場合，そのときの状況や国内法，国際法の制約などを考慮し，難しい判断を迫られるのは必至だ（最終）。（以下省略）

（『朝日新聞』2020年2月4日朝刊）

第6段落文⑫で，政府が日本関係船舶の護衛が必要ないと説明していることを示し，続く文⑬で，その説明内容に対する問題点を指摘することで，政府の説明の不十分さを表している。日本語の社説には，このような先行内容に対する疑問点，問題点，不可解な点を挙げるために接続表現が用いられることが英語よりも目立っている。これは，事態の問題点を明確にした上で，その解決に向けて関係機関がどうすべきなのかについて論を進めるためではないかと考えられ，叙述表現との関連を探る必要がある⁽⁹⁾。

英語は，「b5(1)」だけでなく，有意差は認められなかったが，先行文脈の現状を認めつつ，さらに重要な点を指摘して論を進める「b5(2)」の使用も多いのが特徴的といえる。英語「b5(2)」の文章例を示す。

文章例2 Now, About That Role as Commander in Chief ...（全9パラグラフ26文）

1 ① President Trump's first address to Congress checked nearly all the domestic policy boxes that dominated his public statements during the campaign and his few short weeks in the White House — jobs, immigration, taxes, medical care. ② **But** there was one gaping omission: foreign policy. <中間> ③ Here was his moment to assert understanding of the foreign policy threats and opportunities facing the country, and his vision of his role as commander in chief with a wider understanding of America's role in the world. ④ He failed to grasp it.（以下省略）

（“The New York Times”, March 1, 2017）

冒頭文①で，トランプ大統領が議会での最初の演説で，国内問題についてはほぼすべて触れたという事実を示し，文②で外交政策には全く触れられていないことを指摘することで，話題の焦点を国内政策から外交政策の不備に転じている。文②は文①の内容に対する問題点を指摘したものではなく，演説全体におけるより重要な事実を指摘したものである。この文章は，冒頭パラグラフで文章全体の話題を提示し，それ以降のパラグラフではその話題に沿った具体例を出しながら展開し，最終パラグラフでトランプ氏の大統領としての資質を疑問視し，文章を終えている。英語の社説では，「b5(1)」と異なり，先行内容と対比させ，より問題となるのは何か，より重要な事柄は何かの観点から重要な事実を際立たせるために接続表現を用いる傾向が強い。これは，英語の社説が問題解決というよりは，ある事態の真相がどうなっているのかを究明する論調となっていることが，その要因と考えられる。文章例2についていえば，文②の事実からトランプ大統領という人物についてどう判断，評価できるのかを明らかにすることが文章全体の結論となっている。

英語では，「b5(2)」の機能を持つ“**But**”や“**Although**”が，文章の冒頭パラグラフに用いられ，文章全体の話題を提示する例が全部で3例ある。新聞社説では，“**But**”がパラグラフ内での「b5」だけでなく，冒頭パラグラフで文章全体の「a 話題を示す機能」を持つと考えられる。

さらに特徴的なのが、日本語には2例しかない、先行文脈の内容を完全に否定して論を進める「b4話を拒む機能」の使用が、英語で15例（16.3%）あることである。ある事態の事実関係をはっきりさせ、その上で今後の事態のあり方を論ずる流れとなるため、話題の展開が非常に明瞭になる効果があると思われる。英語「b4」の文章例を示す。

文章例 3 Jeff Sessions Had No Choice （全9パラグラフ24文）

（第1パラグラフから第3パラグラフまで省略）

4⑩ On Thursday, he said he “never had meetings with Russian operatives or Russian intermediaries” about the campaign. ⑪ **Yet** a Trump administration official told CNBC’s John Harwood that Mr. Sessions had talked about the election with the ambassador, if only in “superficial” terms. 〈最終〉
（以下省略）
（“The New York Times”, March 2, 2017）

当時のアメリカ司法長官だったジェフ・セッション氏の、大統領選挙運動についてロシア関係者とは接触していないとの発言に対し、文⑪では、トランプ政権の役人が、セッション氏がロシア大使と会っていた事実を公表したことを述べ、文⑩の内容を完全に否定したものとなっている。文⑪は、第4パラグラフの最終文であり、第3パラグラフからのセッション氏がロシアとの関与を否定する内容に区切りをつけている。

また、先行研究において使用頻度が高いとされた添加型に相当する「b1話を加える機能」は、日本語では「b5」に次ぐ2番目、英語では「b5」「b4話を拒む機能」に次ぐ3番目となっているが、使用率は日・英語とも10%前後であり、現在の新聞社説での使用頻度は高いとはいえない。文頭使用になると日本語でも13%近くになるが、佐久間（1974）における29.2%、西（1998）における20.2%と比べても少ない。これには、日本語では副助詞の「も」、英語では副詞の“also”が代用されている影響が大きいと思われる。

5.3 接続表現の文脈展開機能別出現箇所と段落との関連

本項では、課題3に対する接続表現の文脈展開機能別の出現箇所の調査結果と、出現箇所と段落との関連を分析した結果を述べる。

次の【表8】は日本語、【表9】は英語の文脈展開機能別の出現箇所を調べた結果である。【表6】と同様に「b5話を比べる機能」は下位区分で示す。下段は全接続表現数に対する使用率（%）である。カッコ内は節末、文中での使用例数である。ここでは合計欄で検定を行った。

日本語で接続表現が開始箇所に用いられたのは、全60例中30例（50.0%）で、英語は全92例中22例（23.9%）と日本語の方が開始箇所に用いられる傾向が顕著に強い。日本語は「b5(1)」の接続表現が多く用いられているが、全13例中6例は、接続助詞「が」、1例は接続助詞的な「一方」であり、「b5(2)」においても段落開始8例中5例は接続助詞の「が」であり、開始箇所の半数以上が節末での使用となっている。このことから、段落の冒頭部で文脈の方向性を明示しているわけではないことがわかる。ただ、日本語では、文頭であれ、節末であれ、文脈の流れを変える接続表現は開始箇所で見られる傾向が強いことに変わりはなく、先行文脈からの流れを開始箇所ですら断ち切り、新たな段落を

表8 日本語の文脈展開機能別出現箇所

機能	総数	開始	中間	最終
b1 加える	4 6.7	2 3.3	1 1.7	1 1.7
b2 深める	2 3.3	2 3.3	0 0.0	0 0.0
b3 つなぐ	1 1.7	1 1.7	0 0.0	0 0.0
b4 拒む	2 3.3	2 3.3	0 0.0	0 0.0
b5 (1)	31 (21) 51.7	13 (7) 21.7	11 (7) 18.3	7 (7) 11.7
b5 (2)	14 (8) 23.3	8 (5) 13.3	1 1.7	5 (3) 8.3
b5 (3)	1 1.7	0 0.0	0 0.0	1 1.7
b6 変える	3 5.0	2 3.3	1 1.7	0 0.0
b7 まとめる	2 3.3	0 0.0	0 0.0	2 3.3
合計	60 100.0	30 (12)** 50.0	14 (7)* 23.3	16 (10) 26.7

$$(\chi^2(2) = 11.264 \quad p < .01)$$

表9 英語の文脈展開機能別出現箇所

機能	総数	開始	中間	最終
b1 加える	12 13.0	2 2.2	4 4.3	6 6.5
b2 深める	7 7.6	1 1.1	4 4.3	2 2.2
b3 つなぐ	4 4.3	2 2.2	1 1.1	1 1.1
b4 拒む	15 (2) 16.3	3 3.3	8 (1) 8.7	4 (1) 4.3
b5 (1)	21 (9) 22.8	4 (2) 4.3	9 (4) 9.8	8 (3) 8.7
b5 (2)	31 (15) 33.7	9 (6) 9.8	11 (4) 12.0	11 (5) 12.0
b5 (3)	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
b6 変える	1 1.1	1 1.1	0 0.0	0 0.0
b7 まとめる	1 1.1	0 0.0	0 0.0	1 1.1
合計	92 100.0	22 (8)** 23.9	37 (9)* 40.2	33 (9) 35.9

$$*p < .05 \quad **p < .01$$

形成する機能が「b7 話をまとめる機能」を除くどの接続表現にも備わっていることを示している。

日本語の方が開始箇所で見られやすいのは先行研究と一致しているが、日本語は段落内部（本研究での「中間+最終」）での出現が多いとの指摘は、現在の社説には当てはまらないようだ。接続表現の合計では同数であり、文頭接続表現だけだと、開始18例、中間・最終13例と、開始の方が5例上回ることになる。これは、段落数の増加⁽¹⁰⁾が主な原因と考えられるが、接続表現の種類に関係なく開始箇所に出やすい傾向も認められる。さらに分析数を増やし検討したい。

英語では、開始箇所に従属接続詞（“although” “while”）が用いられたのは5例であり、文中に用いられた等位接続詞“but”11例中、開始箇所は3例で、残りはすべて中間及び最終箇所での使用となっている。日本語と比べて開始箇所での出現が少ないが、これは、“But”の使用法がその原因と考えることができる。先行パラグラフの内容の方向性を直接変える場合にはパラグラフ冒頭部に使用されるが、先行文と対比的に重要な事柄を示す場合は、文章例2のように、開始箇所にある事実に関する文を置き、その次の文の文頭に“But”を用いて文脈を変える方法が、英語では多く見られる。全20文章中「b5」の接続表現がパラグラフの2文目に使用されたのが、パラグラフ中間・最終出現全39例中26例（66.7%）あり、これは全182パラグラフに対し14.3%となっている。英語では、文脈の流れを変える接続表現が必ずしも開始箇所に現れるわけではなく、パラグラフの中間箇所でも話題の進行とともに文脈の方向転換が行われる傾向が強いことを示している。

また、「b1 話を加える機能」「b2 話を深める機能」の接続表現も開始箇所よりも中間・最終箇所に出現する傾向が強い。前の話に関連する話を加えたり、説明をしったりするために用いられるためだと考えられるが、英語の接続表現は概して、先行パラグラフを切り新たなパラグラフを開始する機能が、日本語ほど強くないことが明らかとなった。

日本語と有意差はないものの⁽¹¹⁾、英語の特徴として、最終箇所における使用率の高さも挙げることができよう。使用率は開始箇所よりも高い。結論を示す「b7 話をまとめる機能」が最終箇所で使用されるのは当然として、先行文脈に新たな話を加える「b1」、先行文脈の内容を否定する「b4 話を拒む機能」、先行文よりも重要な内容を示す「b5 (2)」の最終箇所での使用が目立っている。「b4」は、文章例3のように第4パラグラフの最終箇所で、ある人物の発言内容や事実関係の真偽を明瞭にするために、また、「b5 (2)」は、最終パラグラフで文章全体の結論として先行文脈よりも重要な点を指摘するために用いられる傾向が見られ、全20文章中5文章の最終箇所で「b4」「b5 (2)」の接続表現が用いられた（日本語では「b7」の1文章のみ）。つまり、接続表現が、前項で述べた「a 話題を示す機能」のみならず、「c 話題の結論を示す機能」を有していることを示しているのである。

接続表現の文脈展開機能と出現箇所から段落の形成作用を考えると、日本語は各接続表現を用いて新しい段落の開始を明示し、英語はパラグラフの途中で、「b5 話を比べる機能」の接続表現で話題の流れを変え、最終箇所でも「b1 話を加える機能」、「b4 話を拒む機能」、「b5」の接続表現でパラグラフに区切りをつけたり、文章それ自体を終わらせたりする傾向が強いといえる。

6. まとめと今後の課題

本研究は、日・英語の新聞社説に出現する接続表現の使用傾向と段落との関連を、文脈展開機能及びその出現位置の観点から明らかにした。本研究で得られた結果は以下の通りである。

- 結論 1** 5.1 の分析結果から、新聞社説では、英語の方が本研究における接続表現を多く用いており、日本語は「が」、英語は“**But**”の使用率が高い。また、日本語は文頭・節末の出現の差がほとんどないが、英語は文頭での出現が多いことが明らかになった。
- 結論 2** 5.2 の分析結果から、両語とも「b5 話を比べる機能」の使用率が高い。日本語は、特に「b5 (1)」の使用が顕著で、英語は、「b5 (2)」の使用傾向が強く、「b4 話を拒む機能」を用いて事態の真偽を明らかにする傾向も日本語より強いことがわかった。出現箇所では、日本語の方が段落の開始箇所に出現しやすい。
- 結論 3** 5.3 の分析結果から、日本語は、各機能の接続表現が段落の開始箇所に用いられ、新しい段落の開始を明示する働きが強い。英語は、パラグラフの開始、中間、最終の各箇所で話題を提示したり、話題を転換したり、先行文脈をまとめたりする働きがある。また、文章全体の話題を提示したり、文章全体の結論を導いたりするのに用いられる傾向があるなど、「B 話題継続機能」に「a 話題を示す機能」か「c 話題の結論を示す機能」を併せ持つ二重機能が認められることが明らかになった。

本研究は、新聞社説という限定した文章を分析対象に、接続表現の文脈展開機能の使用傾向から段落との関連性を考察したものである。分析した文章や接続表現の数もまだ十分なものではないため、今後分析数を増やす必要がある。また、日本語の社説の英語訳も接続表現の特徴を明らかにするのに有用な資料となり得るので、日本語と英語訳の対照分析も行いたい。

付記

本稿は、2020年11月に行われた早稲田大学国語教育学会秋季例会での口頭発表の一部を改訂したものである。執筆にあたり有益なご助言を下された方々に御礼申し上げる。

注(1) 通常は「段落」の用語を用いるが、英語の文章を分析する際には「パラグラフ」の用語を用いる。

- (2) 市川（1972）では「接続語句」という用語を用いるが、本研究における「接続表現」はそれよりも広い領域を含んでいる。
- (3) 市川（1972）での「文の接続関係の基本的類型」8種は、「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「同列型」「補足型」「連鎖型」「転換型」であるが、佐久間（1974）における8種は、そこから「連鎖型」を除き、「複合型」を加えたものになっている。
- (4) いずれにも掲載されていないが、先行文との意味的つながりがあるものは、筆者の判断で接続表現とする。本研究では、文頭での「あわせて」がそれに該当する。
- (5) “however”のような副詞は、位置的には文中に置かれる場合もあるが、機能としては文頭接続表現と同様のため、本研究では文頭にあるものと見なす。
- (6) 従属節が主節の前に置かれた場合、従属接続詞が文頭に出現することになるが、前文よりも主節との関連性が強いので、本研究では文中にあるものと見なす。
- (7) 佐久間（2002, 2009）では、3類14種の機能が設定されたが、本研究では論説文の文脈の特徴を考慮し、3類9種の機能に修正した。
- (8) 段落の開始箇所は、厳密には段落第1文の文頭箇所を指すが、本研究では、段落第1文内にある場合を「開始」とする。また、段落が1文のみの場合は「開始」、2文の場合は1文目を「開始」、2文目を「最終」とする。
- (9) 叙述表現に問題点の解決方法を表す表現が出やすいことが考えられるが、本研究は接続表現のみに着目した研究のため、指摘するだけにとどめる。
- (10) 1文章当たりの平均段落数は、佐久間（1974）で8.1、西（1994）で14.4、本研究で13.1である。
- (11) これは日本語の段落が平均2.1文で構成されているため、最終箇所に出現しやすいことが反映している。

参考文献

- 石黒圭（2016）「社会科学専門文献の接続詞の分野別文体特性—分野ごとの論法と接続詞の選択傾向との関係—」
庵功雄（他2名）『日本語研究のフロンティア』くろしお出版 pp. 161-182
- 市川孝（1972）『改訂文章表現法』明治書院
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 佐久間まゆみ（1974）「新聞社説における段落区分の形態特質について」『国文』40 お茶の水女子大学国語国文学会 pp. 23-37
- 佐久間まゆみ（2002）「3 接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史他3名『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店 pp. 119-189
- 佐久間まゆみ（2009）「第3節表現の展開・構造」糸井通浩・半沢幹一（編著）『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社 pp. 101-116

- 佐藤恭子（1990）「接続表現の日英比較」『ことばの饗宴—うたげ 笈壽雄教授還暦記念論集』くろしお出版 pp. 551-562
- 西由美子（1998）「日英語の新聞社説における接続表現一文の接続をめぐって—」『言語文化と日本語教育』第15号 お茶の水女子大学 pp. 24-36
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R (1976) *Cohesion in English*, Longman, London.
- Halliday, M.A.K. (2014) *Halliday's Introduction to Functional Grammar*, 4th edn. Oxen: Routledge